



T O K Y O R O P P O N G I R O T A R Y C L U B

東京六本木ロータリークラブ



『エンジョイ ローター』

～Enjoy Rotary～

東京六本木ロータリークラブ会長

W E E K L Y R E P O R T

『夢をかたちに』

～ Make Dreams Real～
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年12月15日

No. 18



平成20年12月1日

卓話 『懐かしいあの頃…そしてこれから』

メディアパーソナリティー

芳村 真理 様



皆さまこんにちは。今日は「懐かしいあの頃」ということですが、私たちの青春は六本木抜きには語れないと思います。渋谷の方から上がってきて六本木が見えてくると胸がキュンとなって、よし今日も遊ぶぞとワクワクしたものです。私はファッションモデルやってたんですけど、あの頃は数えるほどしかファッションショーがなく、なかなか狭き門でした。先輩のモデルはみんな顔が小さくてボーズに出てくるような体型をしていらした。私は背の高さは160ですから全然低いわけですけど、若いってことは自分の容姿そっちのけで、やりたいことにパーっと行けるんだなって思います。婦人雑誌も出ておしゃれの機運が高まって、普通の人を着られる洋服をショーに出してほしいみたいな声が上がってきた頃でした。普通のサイズで普通の人、「来たっ」という感じで、時代が私の方に飛んできてくれた感じです。ショーでは、どういうわけか森英恵さん達が、私というともう真っ赤に真っ白な水玉の派手なお洋服。どうしようと思ったとき、私しかこれが似合わないから私のところに来た、だから私がこれを目一杯アピールするのが大事って思うんです。それで私はモデルみたいに伏し目でターンなんてことしないで、バーンと真ん中に出てって元気良く腕を組んで、「皆さんびっくりしたでしょう。目が覚めたでしょう。」みたいに心の中でお客様にしゃべりかけながら、一人ひとり顔を見ながら歩くようにしたんです。それで私は何が来ても怖くなくなりました。モデルをしたその3年間で自分らしく着こなす術を勉強できたと、今でもありがたく思っています。

「夜のヒットスタジオ」をやって5～6年経ったとき、ちょっとマンネリだなって思って私にスタイリストを頼んだんです。その人達は若いですからパッと私を見て、アッ、真理さん、こっちの服、この髪型ってもう決めてるわけです。

私はともかく任せてやる。ただあの番組は生放送でヘアメイクに1時間しかかない。失敗してもそのまま出て行かなければいけないわけですけど、モデル時代に培った度胸でどんどんやっていました。そんなことが自由にできた時代でした。それが大体1968～9年で、私は多分一番テレビが面白かった時代にやってたような気がします。その頃は今こうしてお話しているような感じでカメラにしゃべっていて、その向こうにいるたくさんの人達が一緒に感動してくださるのを感じながらやっていた。生放送だったので、そういうものがまだ通じる時代だった。ヒットスタジオも出てくる人達はまるでファミリーのような気持ちで、例えば山口百恵さんが引退するとき、スタジオの人達も百恵さんのこと残念がる気持ちとハッピーになってほしい気持ちで、本番なのにもう歌手たちが涙ポロポロ流して百恵さんが去っていくのを見送っていました。視聴率も秒単位で出てくるようになって、芳村のおしゃべりのときには他のスイッチに入れちゃったなんてのが出てくるんですよ。ですから私たちも絶対目を外させないぞっていう気持ちでやっていたような気がします。



六本木はその頃から比べると本当にきれいになったけれど、私にとっては昔の六本木も懐かしくて、一筋、二筋裏に入ったところを歩いているとあの頃のことを思い出します。この世の中、男性と女性しかありません。お互いにちょっとおしゃべりして、六本木に来るときには胸がキュンとなるような頃を思い出してみるのもどうかなって思うんですが、いかがでしょうか。